



つじの しんいち  
辻野 眞一

担当 営業部 お客様係

暑かった夏もようやく終わり、活動的になる季節を迎えました。皆さまいかがお過ごしでしょうか？さて今回のお題「私の今のオススメの本」は、これまでに多くの話題作、問題作を世に問うてきた百田尚樹さんの「カエルの樂園」です。百田さんは様々なジャンルに作品を残していますが、今回は、寓話的な書き方で現在の日本人に問題を投げかけている物語です。

物語は、アマガエルのソクラテスとロベルトが、安住の地を求めて旅に出て、平和で豊かな国「ナパーシュ」にたどり着くところから始まります。ある日、その平和な国に突然危機が訪れ、国内は平和を守るために大論争が巻き起こります。そして国民が出した結論。さらに衝撃の結末。

これは、明らかに現在の日本が置かれた立場に対する警鐘ともとれる内容です。

百田さんは、この物語を通して全日本人に平和とは何かについて考えてほしかったのだと思います。戦争、平和、侵略、憲法9条、集団的自衛権、さまざまな議論を超えて解かりやすく童話のように問題提起されています。私たちが一番恐れなければならないのは、「思考停止状態」、「平和ボケ」なのではないでしょうか。この作品には、賛否両論あると思います。だからこそ私たちは、この議論から目を背けることなく自分自身で考え、答えを出す必要があるのではないのでしょうか。



しらいし あつこ  
白石 厚子

担当 営業部 お客様係

美味しい食べ物が次々と頭に浮かぶ秋を迎えて、何を食べようかとワクワクして毎日を過ごしています。皆さまも秋には、これは食べておかないと、という逸品があるかと思っています。

さて、今回のお題『私のおススメの本』ですが、宮沢賢治の「よだかの星」をご紹介したいと思います。

お話は「よだか」という名前の鳥が、外見が醜い為に、仲間の鳥から理不尽ないじめや嫌がらせを受けて、最後には「名前を変えろ。」とまで言われてしまいます。そんな毎日が嫌になり、星になってしまいたいと思うようになるのですが……。

最後に「よだか」は星になる事が出来るのですが、なんとも悲しく、自分の中でひっかかりのある物語でした。人は生まれた時から不平等であり、理不尽の中で生きて行くものだ。そして自分もまた他の何かの犠牲の上に生きています。この本に出合ったのは私が30代後半と人生も半ば近い頃で、生きていくのに飽きており自分の人生に意欲が無い頃でした。

そんな私に「よだか」は人生は楽しいことより、嫌な事や辛い事の方が多けれど、それでも努力を惜しまず生きていく事を伝えてくれています。